

「特別講演-2」

実験動物の領域に潜り込んで得たもの

京都大学医学研究科附属動物実験施設 芹川忠夫

大学卒業後、これぞと思って、実験動物の生産販売と受託試験を行っている会社に勤めた。しかし、1年4か月後に失業保険受給者となる。それでも、半年間研修させて頂いた国立予防衛生研究所（現在の感染研）の先生の紹介で、建築途上にあった京都大学医学部附属動物実験施設の助手公募の面接を受けて、なぜか採用された。私の役目は動物実験施設の立ち上げ、特に、実験動物の検疫・感染症対策システムの構築と運用であった。悲しいことに、開所式を終えて動物や機器も収容して使用を開始した建物の不備が会計検査員に指摘され、搬入した動物と機器はプレハブ舎などに仮収容され、約4か月間の全面的な手直し工事がなされる事態となった。

この間、東京大学医科学研究所の獣医学研究部に派遣して頂き、マウス・ラットの微生物的モニタリングとイヌのブルセラ病について学ぶ機会を得たのは幸運であった。当時、大学で使用する実験用のイヌと言えば保健所由来のイヌであり、我々の場合には年間1200頭ほどを導入していた。すべて、首輪を付け、お風呂に入れて洗い、ミクロフィラリアの検査をした。その後、声帯切除とイヌブルセラ菌の血液と尿の培養検査も加えた。このような費用対効果の低い検疫をしながら、実験用に生産されたイヌに早く移行すべきであると、つくづく思った。今、その求めていた状況になっていることは大変喜ばしい。

マウスとラットの感染症には、とことん泣かされた。SPF動物とは何かをユーザーやスタッフに説く、即実践が求められる。与えられた施設と設備では根本的に無理なのかも知れないと内心思う。さらに、苦心して作成したルールも遵守されていないという情けない状態を知る。遂には、ハンタウイルス汚染が判明して、医学系のキャンパスのみならず京都大学全体の大掃除をすることになった。SPF動物を使いこなすには、ハードとソフトの両方の整備・拡充が必須であることを再認識した。そして、何やら多くを学んだ。

その後、約30年間利用した動物実験棟を増改築する機会が訪れた。「広く、美しく、使いやすい動物実験施設」を求めて、スタッフ総動員で図面を練った。改修であるが故に避難生活を余儀なくされ、悪環境下での研究支援を約1年間求められた。スタッフの方には大変な苦勞を掛けた。別の

場所に新規の動物実験施設棟を建て、そこに移動するということが出来なかったものか、もうこりごりである。実際、避難先で紛れ込んだマウスやラットの病原体が新動物実験棟に移って後に発見されるというテーリング現象が1年間以上も続いた。その後は、感染症のトラブルは検疫逃れによるものが散見される程度になった。今は、さらなる収容数の拡大が求められる大入り満員の状態で、調整に難儀をしている。

教員であるから、当然ながら教育と研究が求められた。動物実験施設を利点にできる研究テーマが見つければ良いなと考えていた。まずは検疫業務に関わるものとして、イヌのブルセラ病の調査研究から始めて、本病における抗精子自己免疫による雄イヌの不妊についての実験的研究を行った。自由に研究することができて、大変ありがたかった。その後、てんかんモデルラットに関する研究、ラットの遺伝地図造りの研究、そして、ナショナルバイオリソースプロジェクト「ラット」の事業へと展開していった。

獣医学科の学生時代に想い描いていた実験動物の領域は、入ってみると想像以上に面白く魅力的であった。